

## 高等教育と女性の結婚タイミング

—女子大学に注目して—

明治大学大学院 中村真理子

### 1. 目的

本研究の目的は、女子大学への就学が初婚のタイミングに与える影響を明らかにすることである。これまで行われてきた結婚行動の研究では、女性の教育に対する関心は最終学歴や就学年数が中心であった。そのため、最後に卒業した大学が共学であるか、男女別学（女子大学）であるかの違いには注目されてこなかった。

戦後の日本では、四年制大学に進学する女性が大幅に増加しただけではなく、女性が進学する教育機関の多様化が起きた。かつては、四年制大学に進学する女性の大半が女子大学に進学していたものの、徐々に共学大学に進学する女性が増加した。そのため、就学年数や最終学歴が同じ女性の間でも、就学期間を過ごした環境は時代によって大きく異なっている。

さらに、学校は配偶者との出会いの場として一定の機能を持っているとされている。また、共学大学と女子大学のどちらに進学するかという判断は、女性本人や出身家庭の価値観、選好による影響を受けて行われている。つまり、女子大学を卒業した女性と共学大学を卒業した女性との間には、結婚タイミングに差が生じる可能性があると考えられる。

### 2. 方法

国立社会保障・人口問題研究所によって行われている第13回（2005年）、第14回（2010年）「出生動向基本調査」の夫婦調査のデータと独身者調査の女性回答者の個票データを使用し、離散時間ロジット・モデルによるイベント・ヒストリー分析を行った。分析対象は1955～79年生まれの女性である。

### 3. 結果と結論

共学大学を卒業した女性よりも、女子大学を卒業した女性のほうが初婚のタイミングが早いことが明らかになった。そして、このような傾向が観察できるのは、1960年代生まれの女性に限られていることも判明した。

これまで多くの研究において、日本における女性の未婚化・晩婚化の背景には女性の高学歴化があると指摘されてきた。本研究の結果は、女性の高学歴化のみならず、共学大学に進学する女性の増加が女性の結婚タイミングの遅れに寄与してきたことを示唆するものである。

### 文献

天野正子（1986）「戦後期・大衆化と女子高等教育—性別役割『配分』の流動化過程—」，天野正子編，『女子高等教育の座標』，垣内出版：59-92 ページ。

岩澤美帆（2013）「失われた結婚，増大する結婚：初婚タイプ別初婚表を用いた1970年代以降の未婚化と初婚構造の分析」，『人口問題研究』，第69巻，第2号，1-34 ページ。